

〔書評〕

山浦玄嗣著

『ケセン語入門』

早田輝洋

1. はじめに

ケセン語とは、岩手県気仙郡の一方言であり、医師である著者山浦玄嗣氏の母語である。本書出版によせられた賛辞は、開巻劈頭の柴田武氏によるもの他、はさみ込まれた「ミニコミ誌 ささっぱ通信」にも数多く載せられており、ことさら此処に贅言を費やすまでもない。ただ私としては、日本中のあらゆる方言の詳細な記述が欲しい、なかでも最も興味有る方言の一つでありながら全体的な記述の無い東北方言の詳細を知るものが是非欲しい、とかねがね思っていたので、本書の出版を見て心から快哉を叫ばずにはいられなかった。それが東北諸方言のうちのどこか大都会の方言である必要などはさらさらない。できるならアクセントの弁別も有る方言の方が有難いと思っていただけである。ケセン語はその意味からも私の希望にそった方言であるし、著者山浦氏がまたアクセントに並々ならぬ関心をお持ちの方であることも喜ばしいことであった。

本書はその名のとおり入門書スタイルで書かれている。したがって、手っとり早くケセン語の言語的諸事実を知ろうとするには、かなりまどろっこしい感あるを否めない。正書法・術語にしても然りで、母語話者の先生について学習するのではない限り、なかなかこの教科書（および別売のテープ）だけでケセン語の独習を試みても——私も試みたのであるが——東北方言の一つでも解する者でない限り、習得はかなり難しいのではないだろうか。

2. 音韻論と正書法

非常に豊富なテキストを満載しながら発音を併記してあるのは全162課中29課までで、あとは注釈に時に発音を示してあるのみ。他は山浦氏によるケセン語正書法だけで表記されている。これは、なんとしてもテキストの全てに亙って発音を併記して貰いたかった。ケセン語正書法は、音声表記でもなく音素表記でもない一種の形態音素表記に音素表記の混ざったローマ字による「正書法」なのである。相当音声表記に近い音素表記でもない限り、特に形態音素表記の場合は、簡略な音声表記の併記が不可欠と考えられる。一般に形態音素表記だけを用いる場合は、その読み方（発音）の厳密な規則を設定しなければならない。私もそれを期待して本方言に挑戦したのであるが、なんとも挫折しがちであった。例えば、

「ケセン語の二重母音には、ai [アイ], au [アア], ae [アィ], ia [ヤア], iu [ユウ], ie [エエ], io [ヨオ], ua [ウア], ue [ウエ], awe [アエ] [エア], ea = ai [エア],

(14) [書評]『ケセン語入門』

ei [エエ], oa [オア], oi [オイ], ou [オオ], oe [オエ] があります。…中略…ここにあげなかった母音の組合せは二重母音ではなく、したがって別の音節ということになります。たとえば ao は二重母音ではないので、『青(アオ)』はケセン語においても2音節の語ということになります。」(43頁)

ここで先ず挫折感を覚えた。二重母音の表記と音声との対応を覚えるのに相当の勢力を費やす上(その間にも awe にアエとエアが条件を示されずに二通り有るというだけで意気阻喪している)、これ以外の母音の組合せは2音節ということなので、表記と音声との対応ばかりでなく、この二重母音群の成員をも銘記しなければ、ある2母音連続が1音節なのか2音節なのか分らないのである。以下「・」は音節の区切り(山浦氏の記号)。引用でも音調記号は省略する。

「母音にはさまれた子音+くゝは音価を持たないきまりですから、…」(44頁)とありながらも「『懇意] kon'i は「コン・イ」と発音する(50頁)。スペースが関与していないような。「Mir' ai. [ミ・ライ] なお、ai は軽い鼻音をともなって [アンイ] と読みます。」(51頁) となると仮名で [ミ・ライ] と書いてあっても「ミ・ランイ」なのだろうか。これも最初読んだときは、ミアイかミアンイになるのではないかと気になった。このような場合は、仮名が付されていてさえ、どう発音するのか分らなくなり、独習者には真に心細く、自分の読み方に自信が持たなくなってしまう。上の ai が [アンイ] と読まれる、というのもどういうことなのか。二重母音の発音のところでは、次のようになっている。

[ai [aj] : a+i が常に ai [エア] の音になるとはかぎりません。[aj] [アイ] という音になることもあります。このときは i の上にくゝ記号をつけて ai とし、これが [エア] とならず [アイ] となることを示します。」(44頁)

ai が [アンイ] と読まれるのは或る特定の形態素に限っての話なのかもしれない。このアンイというのは、或る表し方では aN'i [aj] とでもなるような2音節のものではないのだろうか。「ゝ」の記号も多様に使われていて、「きまり」の適用範囲もやや明示的でないため前後矛盾しているように見え、理解しにくい箇所があるのは残念である。

3. 母音・子音の無声化

母音ばかりでなく子音の無声化もあって、なかなか面白いようであるが、よく理解できないところもある。例えば、

弱母音 (i, u) は(1)の音声環境で無声化するむね記述されている。

(1) 弱母音無声化 (36頁) (IU は早田が仮に表した iu の無声化した母音)

i, u → I, U / k, s, t, h, p + ___ + k, s, t, h, p, r, y + 強母音 (a, e, o)

ここで、r, y はそれぞれ r, y が無声化してともに [s] になったもの。

また、r, y が無声化して s になる環境は(2)のとおり、とされている。

(2) r, y 無声化 (49頁)

r, y → s / k, s, t + 無声化弱母音 (I, U) + ___ + 強母音

Xつら、顔 \sqcup は $t\bar{s}ra$ [ts̄ɾsa] (\bar{I} は無声化母音) とも言うし $tira$ [ts̄ira] (i は有声母音) とも言うとのことである。しかし、(1)(2)を与えられたのでは、どういう過程で $t\bar{s}ra$ [ts̄ɾsa] (\bar{I} は無声化母音) が出てきたのか分らない。最初 $tira$ から出発すると、この i を(1)によって無声化することはできない。なぜなら(1)では t と、既に無声化された r (r 即ち [s]) とに夾まれた i が無声化する環境なのであって、 t と (まだ) 有声の r とに夾まれた i は(1)の無声化の環境に合わない。また、 r を先に(2)で無声化してから(1)にインプットすることもできない。なぜならば、(2)にインプットするときの $tira$ の i はまだ有声母音であり、(2)は無声化弱母音の隣の r を無声化して s にするものだからである。

4. 形態素・語幹の認定

本書では、動詞の語幹はすべて子音で終る、としている。既ち、第 I 種活用動詞 (我々のいう子音語幹動詞) 例えば X 歩く \sqcup の語幹は $arig-$ であるとしているが (音調記号を略す)、第 II 種活用動詞 (我々のいう母音語幹動詞) 例えば X たまげる \sqcup は $tamaner-$ までを語幹としている (97 頁) (字母は IPA よりのもを用いて示す)。つまり、いわゆる母音語幹にも r を付して、すべて子音語幹とするのである。そうすると、いわゆる r -子音語幹動詞と母音語幹動詞とはどのように区別するのであろうか。テキスト上では(3)のように区別して表されている。

(3) /kar-/ 刈る		/ir-/ 居る	
karu	カル	iru	イル
kara-nag`i	カラネア	ir-nag`i	イネア
kara ba	カラバ	ira ba	イラバ
kar` tar	カッタ	ir dar	イダ

表面形 (音声形) を表すためにはこれでも出来ないことはないが、語幹 $kar-$ や $ir-$ に過去の接辞 (山浦氏では単語) が付いたとき、どうして一方はカッタになり、もう一方はイッタでなくイダになるのだろうか。思うに各動詞語幹には、なにか活用表の如きものと結び付いた第 I 種活用なり第 II 種活用なりの標識が付いていて、話者はそういう標識を語幹の形とともに個々の動詞について覚えている、とするのであろう。

これはやはり、子音語幹と母音語幹とに分けて、強変化 (不規則) 動詞以外は、その語幹末の音により活用が定まる、と考えたい。そうすることにより、語幹の形を覚えるだけで活用が分るのである。上の両活用はほぼ(4)のようになろう。

(4) /kar-/ 刈る		/i-/ 居る	
kar-ru	→ karu	i-ru	
kar-ana-i	→ karanaɛ	i-ana-i	→ inai → inaɛ
kar-raba	→ karaba	i-raba	
kar-ta	→ katta	i-ta	→ ida

5. アクセント

ケセン語正書法では、アクセントは高音記号 (´)・上昇記号 (ˆ)・下降記号 (˘) を当該母音上に記して表す。しばしば無視されるとはいうものの、ケセン語には長音節と短音節の区別があり、長音節は短音節の1.5倍位の長さがある(36頁)。長音節に音調(アクセント)が付くときは、上昇調になるのが基本である(66頁)。短音節で始まる単語で語頭に音調(アクセント)を持つものはない(66頁)。名詞に助詞が後続した場合の例を(5)に挙げる。高ピッチの部分に上線を付す。

(5) 海 山 川
 ウミ ガラ ヤマ ガラ カワ ガラ
 ウミ マデ ヤマ マデ カワ マデ

本書では、(5)の名詞の「ウミ」「ヤマ」「カワ」のアクセントをそれぞれ umí (山浦氏の①型)、yama ▶ (同②型)、kawa▷ (同③型) のように表している。このアクセントの本質はどのようなものであろうか。

(5)を見ると、アクセントの無い助詞ガラの初頭にアクセントを付与するヤマのような名詞もある。短音節自立語の語頭にアクセントが無く、後続付属語の初頭にアクセントを付与することのあるアクセントとは、正に次を高くするアクセントである。これを鋭アクセント記号で表すと、(5)は(6)のようになる。

(6) 海 山 川
 うミ ガラ ヤマ ガラ カワ ガラ
 うミ マデ ヤマ マデ カワ マデ

既ち、これらの名詞は úmi, yamá, kawa、助詞は gara, máde と表すのが一応適当のように見える(同一音韻句中にアクセントが二つ以上有れば2番目以降のアクセントは消える)。しかし、長音節で始まる名詞では第一音節にアクセントが付きうる。(6)では、すべて短音節なのでアクセントの担い手が音節なのかモーラなのか、それともそれらの境界なのか分らない。(7)で長音節を含む単語(名詞・形式名詞)の例を見よう。

(7) 長音節1音節語		2音節語		
a	ホ ^ン 《本》、	マ ^ン 《万》、	コ・テ ^ア 《答》、	ガ・マ ^ン 《我慢》
b	キョ ^ー 《今日》、	ヨ ^ー 《様》、	ミ・デア ^ー 《みたい》、	ヨ・ゲ ^ー 《余計》
c	イー▷《家》、	ハン▷《半》、	ユ・ウエア▷《祝い》、	ケ・セン▷
d	mm▷?		オ・メア▷《お前》、	ガッ・コー▷《学校》

無アクセント(山浦氏の③型)の長音節1音節語((7)のd)が見つからなかったが、おそらく偶然であろう。▷は助詞を表す。(7)を見ると、a型とb型のように同一音節中の第一モーラ高と第二モーラ高とが区別されている。故に、音節あるいは音節境界がアクセントの担い手にはなりえない。しかしモーラが担い手となるとa型とc型とを同時にうまく処理できなくなる。即ち、担い手のモーラを高とするとaの[ホ^ン]は/ホ^ン/でいいが、cの/ケ・

セン/にはアクセントの付けようがない。また、担い手のモーラの次のモーラを高とすると、cの〔ケ・セン△〕は/ケ・セシ/でよいが、aの〔ホン〕にアクセントの付けようがなくなる。結局、モーラ境界をアクセントの担い手とし(8)のように解釈しなければならなくなる。モーラ境界の担うアクセントを「で表す。

- (8) a /〔ホン〕/ [〔ホン〕] /ガ〔マン〕/ [ガ・マン]
 b / キョー〔ー〕/[キョー〕 /ヨ〔ゲー〕/ [ヨ・ゲー〕
 c / イー〔ー〕/[イー△] /ケ・セン〔ー〕/[ケ・セン△]
 d / mm/ [mm△]? /オ・メア/ [オ・メア△]

確かにこれで一応の記述はできるのであるが、山浦氏が明言しているように長音節は短音節の1.5倍位の長さしかないのでは、果してモーラが有意味であろうか。それに長音節に音調(アクセント)が付くときは上昇調になるのが基本である(66頁)という以上、aとbとの対立は問題である。(8)の例はすべて語末音節が長音節なのであるが、語中の長音節には下降調はなくすべて上昇調のようである。それが或る種の語末、あるいは音韻句末、で下降調に実現するらしい。語末で上昇しているbの例は、キョー X 今日 ㊦、デホデア X 随分 ㊦、ヨゲー X 余計 ㊦、フー X 風(形式名詞) ㊦、ヨー X 様(形式名詞) ㊦、ミデア X みたい(形式名詞) ㊦、それにエンガワ X 縁側 ㊦の短縮形イェンカ^ーといった、副詞的なもの、形式名詞、短縮形など多少変わったものである。また X 鯉 ㊦は79-80頁でコイ、コイカ^ーでありながら、232頁ではコイであるし、X 千 ㊦ X 万 ㊦はそれぞれセン、マンであるが、X 万の倉 ㊦はマン ノ クラ である。さらにa型とb型とは文末音調によっても容易に交替するようである。

このような状態から見ると、上のa型とb型の別は真の対立ではない可能性があると考えられる。a型とb型とが真に対立しているのではないのであれば、アクセントの担い手は音節境界ということになり、ピッチ実現化の規則は「アクセント(〔〕直後の音節を高にせよ。その音節が長音節であれば原則として上昇調になるが、名詞の語末では下降調に実現される」ということになろう。最後の所がやや心細い。さきのウミ、ヤマ、カワなどと(7)の単語は(9)のようになる。

- (9) /ウ〔ミ〕 ガラ ヤマ〔 ガラ カワ ガラ〕/
 /ウ〔ミ〕 マ〔デ〕 ヤマ〔 マ〔デ〕 カワ マ〔デ〕〕/
 a /〔ホン〕/ [〔ホン〕] /ガ〔マン〕/ [ガ・マン]
 b = a/ キョー〔ー〕/[キョー〕 /ヨ〔ゲー〕/ [ヨ・ゲー〕
 c / イー〔ー〕/[イー△] /ケ・セン〔ー〕/[ケ・セン△]
 d / mm/ [mm△]? /オ・メア/ [オ・メア△]

実は、この解釈では、短音節の語頭の高い形も過剰生成されてしまう。例えば、/〔○・○〕/は〔○・○〕になる。しかし、テキストにはカツィケル X ~のせいにする ㊦(96頁)という短音節の語頭に高ピッチの来る単語も出てくる。このカツィケルの例は、あるいはツィの無声化によって高ピッチ部が前に寄っているものと解釈できるかもしれない。形容詞の活用においても同様の一連の例があるようである。歴史的には高ピッチ部が、語末長音

(18) 〔書評〕『ケセン語入門』

節内を除き1モーラ右に移動した結果、語頭短音節に高が無くなったのであろう。

モーラ境界も気になるが、一応音節境界をアクセントの担い手とすれば、ケセン語は(10)の如き体系になろう。○は音節を表す。初頭の「○は長音節に限る。

(10)	○	○ ○	○ ○ ○	山浦氏の③型
	○「	○ ○「	○ ○ ○「	〃 ②〃
	「○	○ 「○	○ ○ 「○	〃 ①〃
		「○ ○	○ 「○ ○	〃 ①〃
			「○ ○ ○	〃 ①〃

このアクセント体系はどこかで見たことがある。やや現代朝鮮語慶尚道方言を想わせる。いや、寧ろ15世紀の中期朝鮮語のアクセント体系そっくりそのままである。

モーラは認めなくとも長音節と短音節の区別は認めざるをえない。長音節は短音節の1.5倍位の長さしかないにしても、とにかく区別がある以上は、ケセン語の定型詩がどうなっているのか、長短の音節は詩の韻律や楽譜のお玉杓子にどう対応しているのか、ぜひ知りたいと思う。複合名詞や外来語のアクセントの付け方等々についても情報が得たい。アクセント別の語彙表もほしい。いろいろ知りたいという思いから、つい無いものねだりがしたくなるのである。

6. あとがき

ケセン語は非常に魅力有る言語である。本書は東北方言の詳細な入門書として唯一無二のものに違いない。今回ほとんど音韻と形態の一部についてしか書けなかったが、本書は文法その他についても広範な記述に溢れている。

本稿はとて書評にならず、本書を読んで自分の関心の有るところについて考えたことの一部を述べたに過ぎないものになってしまった。評者の粗忽からとんだ見逃しや見当違いを犯していることを恐れる。このような書評は東北方言に詳しい方に譲るべきだったかと後悔される。本稿をお引受けしてから実に長い時日を費やしてしまい、著者の山浦氏にも国語学誌編集の諸氏にも多大のご迷惑をお掛けしてしまった。偏に寛恕を乞う次第である。

(昭和61年発行 共和印刷企画センター刊 3500円別売テープ有り)

——九州大学助教授——

(昭和63年12月9日 受理)